



参加者の顔に機器をあてて肌の状態を調べる資生堂のブース

## 弘大など 19年目始動

弘前市岩木地区の住民の健康データを集める「岩木健康増進プロジェクト（岩木健診）」が3日、同市の岩木文化センターあそべーるなどで始まった。新型コロナウイルス禍のため昨年まで規模を縮小していたが、19回目となる今年から以前並みに戻す。顔面に直接触れる健診などコロナ禍のため見送っていた新たな項目も加わり、12日までの10日間、約千人が約3千項目にわたって健康状態を調べられる。

弘前大学と弘前市、県総合健診センターの主催。県内外の大学や企業など20以上の機関が参画し、約50のブースでさまざまな機器やキットを使って調査している。今回から受け付けやデータ入力の手

シタル化にも取り組んだ。

昨年から参画している資生堂（本社東京）は、参加者の肌の潤いや弾力などを調べている。昨年のは腕の内側のみだったが、今回は顔も計測。腕と顔の状態を比べて、紫外線などが肌に与える影響を分析する。

同社みらい開発研究所の木村朋子室長（55）は「これまで主な研究対象は関東圏の人のデータだったため、気象やライフスタイルが異なる弘前の人の肌を測定できるのは大きな魅力。環境条件と肌との関係性を解析し、地域の人にも還元していけたら」と話した。

岩木健診は2005年にスタート。集めた膨大なデータから生活習慣と病気の関係性を探ったり、病気の予防法を開発したりするのが主な目的。

（伊藤ほなみ）